

# 新川通信

第5号

平成 24 年 2 月 15 日発行

題字 佐藤 大作

## 忘れられた新川 江戸時代最大級の底樋工事

越後新川まちおこしの会会長 松岡 長孝

♪ 流れて越の野をひたす  
桜花咲く新川や  
静田の祠神さびて  
月澄む秋のお筆山 ♪



新川の畔にある静田神社境内の歌碑

春の訪れと共に桜花爛漫と咲き誇る景観、秋には澄みきった月が川面に映る幻想的な光景です。悠々と流れる正に母なる川、新川の情景が表現されております。80 年余り歌い続けております内野小学校、校歌の一節です。歌碑が静田神社の境内にあります。

“新川” 水害に苦しむ農民を救う為にと命をかけ私財を投じて出来た越後平野の美田こそは、先人達の勇気と慈愛に満ちた行動が、そして血の滲むような苦難の道、汗と油の結晶が完成させた、新川掘削の大工事であります。いつの世までも語り継がれる偉大なる功績であります。私は今静かに先人達の偉業に万感の敬意を表したいと存じます。

この素晴らしい文化遺産を守り後世に伝える事が越後新川まちおこしの会員の責務だと思っています。

平成 19 年 2 月 44 名で設立した当会も、現在は 100 余名の会員で、国会議員、大学教授、外国人、社長、官僚そして私のような職人と実にバラエティーに富んだ、多士済々、国際色豊かなメンバーで構成されております。

新川をこよなく愛し続け、かつてはこの川で泳ぎ獲れた魚を食材にしたあの頃の美しい川にしたいと、『泳いだ、食べた新川』をキャッチフレーズに情熱を傾注された、故佐藤前会長様、故丸山事務局長様を始め、役員、会員の皆様の労苦に心からなる感謝の意を捧げたいと存じます。

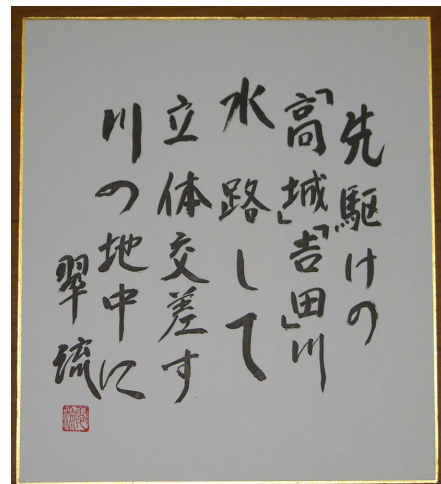
行事も数々ありました。その一部です。

- ・ 野外音楽祭の新川に響く美しい歌声
- ・ 新川舟下り、舟の上より見る内野の街並みは、新しい発見でした
- ・ 捕獲魚類等の調査、新川クリーン・ウオーク
- ・ 川の立体交差全国サミット
- ・ 新川普請まるごと博物館は、期間中 3,000 人余の来館者がありました

内野町始まって以来のイベントの数々でした。

新川を愛し、志半ばでご逝去されました、先輩同志の方々のご冥福を祈り、その熱い遺志を守り、この誇れる文化遺産を後世に残すべく、全員一同がより強い絆で「越後新川まちおこしの会」ここにありと、その名を天下に轟かせるべく共に手を取り合っで力強く邁進致したいと思ひます。

会員皆様の限りないご健勝を、心をこめてご祈念申し上げます。



会員の笹川 悦夫さんの作品①

## 追悼文

越後新川まちおこしの会  
前会長代行 小林 勇

月日のたつのは早いもので、越後新川まちおこしの会の事務局長丸山幸平さんがご逝去されて、この1月で九ヵ月経過しました。会員の私どもは、今もなお心のどこかで事務局長さんが私たちの前から永遠に姿を消してしまわれたということに納得できないようなところがあります。

事務局長さんは、生前新潟大学農学部教授として奉職され、教育家として立派な功績を挙げられました。教授を退任された後、新潟市西区広通町自治会の多くの会員から要請され、自治会長に就任され地域社会の振興に尽くされておりました。



いつも笑顔の丸山さん

5年前に、「よごれに汚れきった新川の悪水に心をいため」この新川を「泳いだ、獲った魚を食べた新川」あのころの新川を再現しようと、志を立て故人になられた佐藤大作氏ほか有志に呼びかけ、越後新川まちおこしの会を結成 110 名をようする会員の先頭にたつて、会の目的達成のため活躍されておりました。

ところがこの活躍中に病魔におそわれ、入院され手術を受けられて退院、退院後は病気と戦いながら会の目的達成のため常に全身全霊を打ち込んで、会員の先頭にたつて努力精進されていた姿は今も忘れることができません。事務局長さんは突然帰らぬ人となってしまいましたが、残された私達会員は事務局長さんが描かれた壮大な夢、越後新川まちおこしの会の目的達成のため最善を尽くす決意をお伝え申し上げようと存じます。どうかいつまでも私達会員をお見守りくださるようお願い申し上げます。

## 新川への父の想い

～つながっている山・川・海。  
人の心もつなげたい～

丸山 顕

五十嵐中島に居を構えて約 30 年、父（当会前事務局長 幸平）の大学への通勤路の途中に新川があります。あの頃は、どんな想いで四季折々の新川を眺めていたのでしょうか。特に関心をもっていたのは、「歴史遺産として誇れる川」ということと「汚れが目立つ川」という 2 点だったように思います。

5 年ほど前の夏のある日、「新川のことを知っているか？」と父に突然聞かれたことがありました。とっさに頭に浮かんだのは、内野小学校近くの新川沿いにある大きな縦看板の『よい子は川で遊ばない』という標語、そして東洋一（当時）を誇る排水機場が河口にある川、という程度の認識しかありませんでした。やっぱり、と思ったようなあの時の父の顔は今も忘れません。



念願であった立体交差案内板設置除幕式(H20.4.29)

### (1) ゼロからの出発（仕掛け人）

新川について父が具体的に取り組み始めたのは、町内会長の役が回ってきたことがきっかけだったようです。以前からこのような役には全く消極的で苦手分野でしたが、諸般の事情から引き受けることになり、どうせやるならその町を含む地域の活性化を考えたい、という思いが強くなったようです。大学では林学を専門とし、ブナ林の研究や自然環境の問題に取り組みましたが、地域活動などは素人の父でした。それでも一度やると決めると真っしぐらに行動する性格でしたので、全くゼロからの出発でしたが、新川の町おこしの会の仕掛け人として、試行錯誤を繰り返しながら真剣に取り組んでいました。

町内会長の立場だったため、幸いにも内野コミュニティ協議会の方々のお力添えをいただけたことは、とても大きかったことと思います。

そして、西区や西蒲区の各地域の代表の方々を一人一人訪ねて回り協力をお願いしたり、行政機関に出向いたりしました。その際も同町内会の役員のお一人、浜倉剛氏に大きなお力添えをいただきました。また、地域で活躍されている卒業生やその関係の方々からも貴重なご意見をいただくことができ、とても恵まれたスタートでした。



新川河口の夕暮れのスケッチ

## (2) 人々が愛する新川

会が発足し、一歩踏みだした時に地元の方々から「当り前の川のよさを再認識した」という声が多く聞かれ、「たくさん協力をしてもらい、町の方々の熱意、意欲は本当に素晴らしい」と父は嬉しそうに話していました。

会長を快諾された佐藤大作氏も大変お忙しい中、時間を遣り繰りしては「いますかね」と訪ねてくださり、以前（40～50年前まで）の地元の方々と川との関わりを知らない父に「泳いだ 食べた 遊んだ新川」の話をしてくださったそうです。時には佐藤氏の手作りのスイカの味噌漬を持参で来宅され、酒を酌み交わしながら新川について熱く語ってくださったそうです。



望年会で故 佐藤会長と酒を酌み交わす(H19.12.17)

また、やしち酒店の鈴木徳義氏（9月に他界）も時折立ち寄られ、小さい頃から青年団活動までの地域と新川の関わりについて、教えてくださったとのことです。そのほかたくさんの方々が新川をご縁に訪ねてくださり、さまざまなお話を伺う中で、新川が人々に本当に愛されてきた川であることを父は実感していたようでした。



西蒲原見学会-鎧湯排水機場にて(H19.9.30)

## (3) 新潟の貴重な遺産と地域の財産としての新川

父は、新川について「その存在が当然になり、貴重な宝が遠い存在になっている。親しめる川として何とか再認識し、昔の遺産価値だけでなく、今の私たちの生活に生かせる川、町の活性化にも役立つ川として考えたい。江戸時代の越後人の汗と根性の結晶は、今の越後人の根性で回復できるはず」と熱く語ることもありました。

一人でゼロから始めた会でしたが、父の考えに耳を傾け、賛同し、活動に熱心に参加して下さる大勢の方々に助けられ、短期間で多くの活動ができるまでになりました。この地域の方々の力は、よどみなく悠々と流れている新川のような大きな力にも感じられます。今では、父も安心してこの会をどこかで見守っているように思われます。



能登の灯台にて(H20.7.30)

# 三陸被災地訪問報告

安富 佐織

2011年11月13日、14日に視察研修に行ってきました。はじめは参加しようとは思いませんでした。でも、ふと見たテレビで被災地の方の「観光でも何でも、どんな形でもいいからとにかく来て下さい！見て下さい！」という叫ぶような強い言葉を聞いた時、私が被災地に行くことにも意味があるんだと思いました。

宮城県松島町にある吉田川サイフォンという、川の立体交差（わが内野の新川開削と同様、江戸時代から何回もの難工事をして来たそうです。）の見学に加えて、岩手、宮城両県の沿岸を2日間マイクロバスで巡って来ました。



2日目に見学した吉田川サイフォンにて初めての集合写真

1日目は、当会の丸山様の同級生山崎様と佐々木様（大船渡市在住）にバスに同乗していただいて案内、説明をしていただきました。そのあと昼食をとった食堂では、従業員の方が震災当日の様子を話してくださいました。「語り部のつもりで話します。皆様も、一人でも多くの方々に伝えて下さい。」と言われました。

2日目は、朝日新聞社南三陸町駐在の三浦様の案内で、南三陸町立戸倉小学校と、その時小学校に集まった人達全員が助かった避難先の神社にも足を運びました。今回被災地に実際に行ってみて、被害のスケールの大きさに打ちのめされました。マイクロバスで走っても走っても、次々に出てくる海岸沿いの街はどこも、跡形もないのです。夜は灯りがなく真っ暗です。どこまで行ってもそれが続きました。

1日目も、2日目も。バスを降りて歩くと、コンクリートの基礎だけが並んでいる住宅街、ねじってちぎれたようになっていく街灯の金属柱のあと、紙のようにくしゃくしゃになった車が積まれた山々々・・・



電線を超える大きさの船がまだ道路沿いにあった

街はどこまでも平たくなってしまい、ひしゃげた窓枠や、ドアの枠が転がっていて、所々に立っているコンクリートの建物の窓はガラスも窓枠もないただの四角い穴で、そこからブラインドや、コードや、通り抜けて行ったいろいろなものの残骸がぶら下がって痛々しい姿をさらしています。建物の上に乗用車が乗ったままだったり、海から何キロも離れた街なかに大型船が残されていたり、信じられない光景もあちこちにありました。どこまでも続く被災の町並みを手を合わせ、涙を流しながら歩きました。

三浦記者が教えてくれた言葉に「津波でんでんこ」という言葉があって、津波の時には、まわりの人にかまわず自分一人で逃げろ、という意味と、家族はそれぞれバラバラに逃げて、そのうち誰か生き残ったものが家を継げ、と言う2つの意味があると聞きました。昔から津波に襲われ続けた三陸の人々の厳しい歴史を突きつけるようです。現地の方々に説明いただいていたいろいろとわかりました。本当に有り難いことと思います。これから長い復興への道のり、私にできることは何かと考え続けようと思います。

新潟に帰って数日後、宿泊したホテルで頼んでおいた気仙沼の戻りガツオが届きました。本当においしかった。新潟でいつも食べている冷凍物とはやっぱり違いました。



気仙沼より届いた戻りガツオ

# 先進地視察 吉田サイフォンと東日本大震災被災地訪問見聞記

笹川 悦夫

大船渡

2011年11月13日4時20分起床。手早く大リュックを背にJR小針駅へ、5時12分始発に乗車して内野駅に下車。駅内ベンチに時を待って5時50分、加藤氏運転のマイクロバスにて出発す。途中運転者の遠藤氏乗車、計14名に。

車中は、松岡会長挨拶あり、加藤氏行程の案内を、小泉事務局長の日程説明あり。大熊孝先生より大震災の講義を受けて、立体交差視察、被災地研修の旅に向かったのです。同乗の安富さんの震災証明書ありて高速料金の恩恵を受け、車中は和やかに目的地へ、心は勇みます。

中央IC⇒磐越自動車道⇒郡山JCT⇒水沢IC⇒国道4号⇒国道397⇒大船渡へ到着。

大船渡に降りて目にするは、唾然たる光景なり、津波に浚われて障害物なく町の彼方まで見える。防波堤が崩落、大津波の威力に身震いがする。引き裂かれた街大船渡は、廃墟で感無量に胸が詰まり言葉にならないものでした。



11月14日朝8時30分、南三陸ホテル観洋ロビーにて三浦英之氏（朝日新聞記者）より南三陸町の震災時の話を聞く。生の状況を詳しく受けたまわり、同氏同行にて大津波の渦中の戸倉（とぐら）小学校へ案内された。荒れ果てた道・軟弱な土砂混じり木片ガラス破片を踏みて校舎に向かう。



校舎3階の天井まで津波は到達し、窓枠のみになっていた

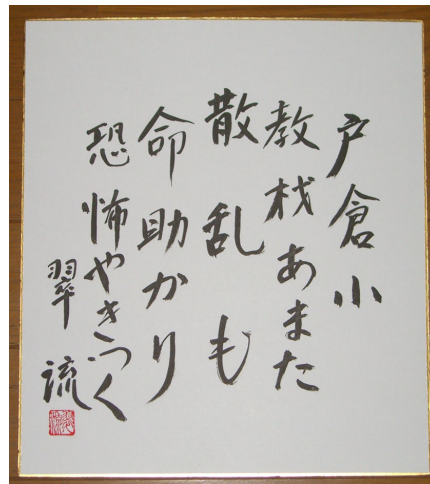
1階、2階、3階へ、惨憺たる児童のアルバム、水筒、スリッパ、サッカーボール、ノート、布袋等々教室に山積みされており無残。多くの水に漬かり泥だらけの備品は、今も目に焼きついている。児童は、大津波の恐怖を思い出したくないのか、私物を取りに来ていない。おそらく児童たちは、学校に行くことも考え付かず放心状態ではないであろうか。



2階の教室には津波の時のランドセルが置いてあった

震災時、戸倉小学校・麻生川校長の気転で山へと。津波の高さ推定25m位に対して山登り到達した地点は35m位か。その五十鈴神社に全校生91名必死の逃げで全員助かり瞬時の行動が命運にて、紙一重の行動の賜物と思います。五十鈴神社に辿りつきも全員社殿に入りきれなく、低学年児童を社殿の中に高学年児童は、神社の前で野宿、焚き火で暖を取り寒さの中、朝を待ち明かす、厳しき季節なり。

翌日の気候も雪が降りしきり 昼に中学校に向い全員移動せしも、余震再々有れば行動ありし時津波に遭遇あらんかも、むしろ災いが起りしもと。苦しくても動かず救援を待つが最良なりと記者はかく語りたり。世直しの教訓に致したいと存じます。因みに校長は埼玉県出身、北海道大学通信教育卒業の方であります。



会員の笹川 悦夫さんの作品②

# 東日本大震災被災地の記憶を残し後世に伝える為、 三陸地方沿岸部の被災地・視察研修に参加して

佐藤 正人

11月13日(日)早朝6時、暗がりの中13名を乗せたマイクロバスは内野駅を出発しました。

新潟中央インターより磐越道から東北道を北上し順調に岩手県に入り、世界文化遺産に指定された中尊寺がある平泉を通りすぎ、まもなくバスは水沢インターを下り水沢東バイパスを通り、紅葉が残るR397～R107(盛街道)を下り、山並みの盛川沿いの大船渡市に入りました。廻りを見渡しても壊れている家屋は殆どありませんでした。

ドラゴンレール大船渡線の終着駅・盛駅前で、丸山久子さんの大学時代の友人の山崎さんと、ボランティアガイドの佐々木さんの二人から乗っていただき説明が始まると突然周りの景色は一変しました。

道沿いに建物が無くなり残っているのは木造住宅の基礎コンクリート、まばらに残っているガラスが無い鉄筋コンクリートの建物、鉄骨むき出しの建物、所々に積み重ねられているガレキの山と壊れた自動車の山、道端の大きな船が目を奪う！！

この辺で港から3kmで波の高さは2階の屋根迄達し6m位だったそうです。港に近づくに従って津波被害状況はひどく、大船渡駅は港から300mしか離れていなく駅舎は跡形も無くなっていました。大船渡港は地盤沈下がひどく、使用出来る岸壁も限られたごく一部に限られている状況でした。更に大船渡湾の防波堤はことごとく引き波に破壊されて無くなっていました。

その後、碁石海岸レストハウスで昼食を取り、その従業員の渡辺さんから地震発生から避難生活の状況等生々しい実体験を聞き、改めてマグニチュード9.0という観測史上最大の地震の凄さを実感させられました。



地震と津波を思い出しながら語ってくれた渡辺さん

その後 陸前高田市に入り大津波に耐えた奇跡の1本松と、低層部が破壊されたホテル1000を見ながら岩手県を後にして宮城県気仙沼市に入りました。

町の中心部はコンクリート造の建物こそ残っていますが地盤沈下がひどく、海面と同位まで下がり町全体が水浸しで、かろうじてメインの道路は砂利で盛り上げてある為通行可能でしたが、町全体が廃墟化していました。各河口に作られた水門はことごとく破壊され、また橋脚だけが残された三陸鉄道気仙沼線を見て大津波の破壊力凄さを再認識し、これが《想定外》かと思いました。夕暮れに差し掛かり、R45号(東浜街道)を南下してバスは丘を下り平らな南三陸町に入り私達は愕然としました。

町に家が無い！！海岸線1.5キロ幅で3つの川に沿った細長い三角形扇状地は奥行き約3kmまで高さ15m位の津波が突き進み、あらゆる物を流し去ったのです。残っているのは数棟のコンクリート造の公共施設ですが4階までは、津波が入り込み散々としていました。

2日目は朝食前6時に早朝の南三陸町の視察に向いました。パトカーが何台も警戒活動を行っている中、バスは南三陸町防災対策庁舎へ向いました。鉄骨造3階建の庁舎は赤い鉄骨だけの無残な姿で残っていました。

地震直後からこの庁舎の2階で防災放送の担当者だった遠藤未希さんは、「6mの津波が来ます、急いで高台へ避難して下さい」と町民に避難を呼び掛け続け、この放送でどれだけ多くの人達が助ったことでしょうか。残念ながら遠藤さんは今だ行方不明だそうです。最後まで職務を全うした彼女は凄いと思います。庁舎玄関前の祭壇に全員が犠牲者の冥福をお祈りしました。

合掌



鉄骨だけが残る南三陸町防災対策庁舎

2階屋上に漁船が上がっている志津川病院、3階屋上に自動車があるアパートを見ながら漁港に向いました。魚市場は緊急に作られた真新しいテント貼りの市場では次々と元気に跳ね上がる鮭が水揚げされていて活気がありました。漁師の方に声を掛けると忙しい中でも話してくれ「いつまでもくよくよしてられねー、俺たち魚獲るしかねーぺ！」と元気な声で答えてくれたので安心しました。殆んど船が流されて無くなり北海道を中心とした船を買い取って漁を始めているようで、少しずつ復興に向っている状況を感じ「ガンバレー南三陸町皆さん」と声を掛けてきました。



出来たばかりの水揚場には活気があった

宿に戻り朝食後、このホテルに泊まり込み報道活動をしている朝日新聞社の三浦さんの案内で隣町の戸倉小学校へ向いました。3階建て校舎のガラスは無くアルミの枠は折れ曲がり、地震の10日前に竣工したばかりの体育館は外壁が全て剥がれ落ち屋根は全く無くなり青空天井になっていて津波の破壊力の凄さを物語っていました。

校舎の中に入ると全ての天井が剥がれ落ちていました。教室の後ろの棚にはランドセルがいくつも置きっぱなしで楽器や本なども残っていて、急に虚しさと悲しみが込み上げてきました。屋上に上がってみるとカキ殻や千切れた魚網が散乱していました。津波の高さは3階建ての屋上迄達していますから15m以上だったことを再認識し、多勢の生徒が亡くなってしまったんだろうと思いました。

ところが校舎を出て三浦記者の話聞いて驚きました91名の生徒と先生は全員無事だったのです。それは校長先生のとっさの判断だったのです。気象庁からの最初の津波発表の高さは6mだったし、チリ津波地震でも2.4mの高さしか来なかったので校舎屋上へ逃げようと思いましたがあまりにも大きな揺

れが長かった為、校長先生の判断で300mくらい離れた海拔15mの宇津野高台に全員避難させたとの事でした。しかし、宇津野高台から見ていて海の沖にある防波堤が大津波に壊され、さらに小学校にぶつかる大津波の様子を見てここでも危ないと、さらに奥にある石段を10mくらい登り、五十鈴神社の境内にたどりつきました。驚いたことに10m下にあったアパートも流されてしまったそうですし、神社の周りは津波の水でとりかこまれて島の様になっていたそうです。

夜になると雪が降り始めた為、幼児とお年寄りには神社の中に入り、その他の人達は炊き火を燃やして子供達を中心に大人が取り囲むように輪になって百数十名が一夜を明かし助かりました。

この三陸地方では昔からこのような諺があるそうです。『津波でんでこ』その意味は、それぞれとか家族が各自ばらばらに1人で高い所へ逃げなければ助からないぞと言う意味で、この諺が今度の津波の犠牲者の多さがまさに物語っていたと思いました。私達は多勢の尊い命を救ってくれた五十鈴神社に参拝し貴重な説明をして下さった三浦記者と別れて大川小学校へ向いました。



完成10日で鉄骨だけとなった体育館と、戸倉小学校校舎

バスは北上川と皿貝川の背割り堤の道路走り新北上大橋を渡ると左手に石巻市立大川小学校が見えてきました。

コンクリート打ち放し仕上の近代的な校舎です。バスから降りて、まず目にしたのは、学校前に建てられた慰霊碑と正座して赤子を抱きしめる母の石像でした、その前には花や供物が沢山供えられロウソクと線香が焚かれ多くの方の悲しみの深さを物語っていました。全校生徒108人の内7割に当たる74人が犠牲になり先生も14人の内10人が犠牲になったのだ。なぜ大川小学校だけがこんなに多くの犠牲者

がでたのかとインターネットで調べてみました。

すると沢山の情報や記事がありましたのでまとめてみると、当日校長は不在でした。14時46分の地震発生と同時に校舎内にいた生徒は、先生の指示で防災マニュアル通りに机の下に入り揺れが治まるのを待ちました。揺れが治まると全校生徒108人が1次避難所に定められた校庭に集合し点呼を取り全員の無事を確認をしました。



大川小学校の正面玄関前

しかし、学校と行政では、次に避難する2次避難場所が定められていませんでした。又学校の位置する釜谷地区は海岸から4km以上離れていて300年以上も津波被害は無く、明治29年に発生した明治三陸地震(M8.5 大津波30m以上。死者2万7122人)や50年前のチリ地震津波でも被害が無かったそうです。

ですからこの地域人達は津波に対しての危機意識が薄かったと思われます。以上より

- 1、2次避難場所の未設定。
- 2、津波に対する危機意識の低さ。

この2点が多く犠牲者がでた要因だと思います。結果論ですが、学校から200mにある裏山に避難道があればとか、先生方は地震発生から津波が来るまで30分の間に何で校庭にと止まり避難しなかったのかや、子供を亡くした親だったら言う事も当然かもしれません。再びこのような多くの犠牲者を出させない為にも行政・学校・地域が一諸になって2次避難所の決定と避難通路の整備を考えていく必要があるのではないかと思います。

バスは悲しみの大川小学校の校舎を離れ海岸沿いと山道を走りコンクリートの建物がポツリポツリしか残っていない雄勝町や全く津波被害の無かったと言う女川原発を遠目で見ながら女川町に入りました。

以前来た時にすごく美味しい海鮮丼を出してくれた女川駅前の食堂は跡形も無くなっていました。

石巻の市街地は大部浸水したようですが急ピッチで復旧されていると感じましたが海岸通りの方は市街地に比べ津波被害が大きく、復旧にはまだ程遠い状況でした。

この度2日間に渡り東北三陸地方沿岸部を、岩手県大船渡市から宮城県石巻市迄の被災地視察研修を総括してみました。

まず三陸地方沿岸部は、リアス式海岸で山が海までせり出し、湾の奥に川によって出来た扇状地に町が作られている為、太平洋上で発生した津波が湾の幅が狭くなるほど上へ高く迫り上がり津波の高さは15m前後にもなり多くの町を飲み込み押し流し、こんどは引き波が全てを海へ奪い去ったのです。地震が起き津波が発生したら、とにかく各自が高い所へ逃げるのが一番だと教えられました。

政府は昨年末臨時国会で《津波防災地域作り法》を成立させました。その中には防波堤の倒壊などの最悪の条件の想定を原則に、都道府県が津波による浸水の規模や地域を想定するように求めています。私達の住む日本海側でもM9クラスの巨大地震と15mクラスの大津波を想定した震災対策をとらなければなりません。

第一に逃げ道と逃げ場の確保決定です。自治会単位では第一次避難場所は定めてありますが次に避難する一番近い高台の2次避難場所を早急に決定し周知の徹底を図らなければいけません。

第二に津波進入部の強化で新川と関屋分水河口水門の強化を急ぐべきです。この2点を地域と行政が一体となつての構築が急務です。皆さんも日頃から家族全員で住んでいる地域の形状を話し合い、津波に対しての安全な地域づくりに努めましょう。



3階まで津波に襲われ屋上に取り残された乗用車



## 希望の1本松

～明日へ続く希望の光～

丸山 久子



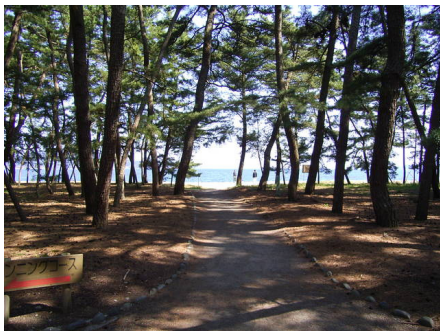
奇跡的に1本だけ残った希望の松

被災地訪問計画(11/13～14)に参加させて頂きました。現地に着くまでの私の頭の中は、陸前高田の海岸はのどかな青い海と7万本の松林のイメージでした。というのは、丁度10年前に夫とドライブした際にこの地を訪れた記憶が鮮明に残っていたからです。たとえ退職したとはいえ、私どもは色々な用件に追われる日々でしたが、それでも寸暇を惜しむように夫婦で旅に出ました。年に1,2回ほどの旅がライフスタイルの1つになり、林学が専門の夫は、遠出の際は必ずスケッチブックを片手に森林関係に立ち寄るのが楽しみの1つのようなのでした。

三陸を目指しマイカーを走らせたのは10年前の2001年9月でした。陸前高田のあの7万本の松林(千本松原ともいう)にも立ち寄り、一緒に佇み、しばし松の声に耳を傾けました。津波の歴史、防風林、それへの備え等を夫は口ずさんでいたようでしたが、私は初秋の澄わたった紺碧の海から松林を抜けてくる海風の心地よさにただ無我なひと時であったように思います。

その時、夫はあの7万本の松に何を話し掛け、松の声をどのように聞いていたのでしょうか?一端の造林学者としての夫の言葉が今は聞けないのが残念です。

この度の被災後の訪問では、幸いにも1本の松が残り、その種子が発芽の可能性があるということですから。私たちに語りかけた7万本の松の1本。その中のどの松であったのでしょうか。明日へ続く大きな希望の光であると感じました。



津波の来る前の7万本の松林

## 春の新川水系一斉清掃

折中 隆子

6月18日(土)曇天

当会の松岡会長の挨拶から始まって、日本福祉医療専門学校共催、西区役所、西蒲原土地改良区の協力のもと、ボランティア活動感謝状がもらえるという事もあってか当会の会員は勿論の事、内野中学校(60名)、西高校生、専門学校生、新大生、地域一般、企業の方々、それに引率の先生方を含めると150名程の参加者を得、それに西スポーツセンターで避難生活を送っていらっしゃる東日本大震災の被災者の方々の参加もあって、かつてない程の大勢の皆さんの参加をいただきました。



福島から避難された方へボランティア証明書を差し上げました

新川堤防の上流、下流側、船からとそして鎧湯排水機場の4ヶ所に分かれての清掃は、大収穫?のゴミの山!!その山を囲んで立体橋の脇でハイ・ポーズ!!

TVの取材も有って、南相馬からの団長さんと光栄な事に私も夜のニュースに2回も放映されたとかで、見た人から後日『頑張っているんですネー』などと言われました。

記念写真を撮った後隣の専門学校で、星先生を中心とした、先生方、地域のお母さん、南相馬の皆さんで南相馬風のスイトンと、珍しいカツオの焼き煮の料理など作って待っていて下さった。そこでは心温まる交流会を持つ事ができました。(因みに感謝状の名前書きが忙しかった当会の事務方の何人かは、食べられなかったと残念がっておりました。)



全員で記念撮影

# 子ども達との新川での魚さがし

山岸 俊男

平成 23 年 7 月 23 日 (土) 8 時 30 分に新川と西川の立体交差の左岸には、おおぜいの親子が夏休みに入って初日の休みであり参集していた。子ども達にとっては、恰好の夏休み自由研究の題材でもある。この新川生物調査は昨年から実施して好評であったことから今年度も引き続き 2 回目の開催である。

主催は当会、共催に新川沿いにある日本福祉医療専門学校、当地域の水管理を担っている西蒲原土地改良区と共におこなった。専門学校の生徒さんからは、ボランティアで手伝いにきてくれ、土地改良区の方々からは、子供たちに手袋や水耕栽培のポットなどを配っていただいた。



新川まるごと博物館前に集まった親子

今年の開催は毎年 4 月におこなっていた「観桜会・舟下り」が、3.11 大震災のため中止していたので「舟下り」を合わせておこなうことになった。この舟下りは、子供から大人まで極めて人気があり、10 時からの予定が列をつくって待っているのが、急遽、開始時間を早めての運行開始となった。

新川生物調査は、午前 8 時 30 分小泉事務局長の司会、松岡会長の挨拶で始まった。

次に、魚専門家の斉藤さんが、初めて魚に触れる子供たちに注意する点を説明してくれました。前日の 22 日、準備のため新川にて定置網を 4 箇所設置し、翌朝に捕獲確認をした。



前日に仕掛けた網と獲れた魚を説明する風間さん

その結果、河口に近いところではスズキ、ギギ、上流へ行くに従いスズキ、コイ、フナ、ボラなどが生息していた。また、近くの堀井さんからは子供たちのために、前日、西川でザリガニ、フナなどを捕獲してもらいました。



新川で獲れた魚を生き生きとした表情でいじくりまわす子どもたち

昨年は約 70 名位の参加者でしたが、今年はチラシを少し遠くの小中学校まで配った効果があり、150 名以上の親子が来てくれました。魚を手にとるのが初めての子供たちは、恐る恐る触れては大きな歓声を上げていたが、慣れてくると魚と戯れて生き生きとした子供たちの顔が見られた。

子ども達にとっては、夏休みの初日から思い切り楽しく遊べたと思われる。

次に、投網による魚の捕獲実演である。堀井さんの昔とった杵柄の投網の腕は確かなものでした。



見事に丸く網が開いた堀井さんの投網

風間さん、山浦さんのお魚専門家からは、捕獲された魚の特徴や性質などの指導を受けて、親子で一生懸命にノートに書き取っていた。

そうこうしている内に、川下りの乗り場に順番待ちの列ができはじめた。10 時スタートの予定であったが参加者が多いため 30 分早めて受付をし、専門学

## 洗堀の歴史と浄化対策

藤巻 英弥

校の生徒さんからは、子供たちのライフジャケットをちゃんと着けてもらう手伝いをしてもらった。

川下りの舟は、内野漁港の横尾さんの船外機と、新潟水辺の会のゴムボート2艇、カヌー3艇で、新川の水面からの体験してもらった。あまりの快適さ、楽しさから子ども達は、船外機次にゴムボートそして自分でカヌーを漕ぎたいと順番待ちであった。



ゴムボートにお父さんと乗って新川を楽しむ子どもたち

人気なのは、カヤックやカヌーなど自分でオールを使って作業することにありそう。お父さんと子供たちの表情が最高に楽しそう。

「新川生物調査と新川川下り」行事は、星先生の呼び掛けで、福島県から新潟へ避難されている方も来て新川での1日を楽しんでくれました。この日は風もなくそしてそれほど暑くもない中、事故もなく無事に行う事ができました。



お母さんと一緒に初めてのカヌーに乗る

乗船者は最終的に合計延300名近い方々で、初めてカヌーに乗る親子は前に進むのも大変でしたが、楽しそうでした。皆さん新川の川下りに満足でした。

最後に、船などを片付けた後、ご苦労会を野外のテント下で行いました。

洗堀の浄化を考えたのは、5年前、1番町のこの堀は、どうしていやな臭いが出るのか、きたない泥がたまっているのか、と気づいたからだ。ちょうど、その頃、新川をきれいにする会（越後新川まちおこしの会）が発足した。洗堀も川のひとつと思いつき何とかこの会で浄化活動出来ないかと、洗堀の歴史を調べた。なんと、新川ができる前から、早潟から西川へ流れ込む川（旧広通江）として、存在していた。

江戸の末期、新川の開削により断ち切れ、逆に、西川より新川へ流し、農業用水として、重要な川であった。昭和40年頃から水田が宅地になり、雨水と家庭排水だけの汚い堀となったのである。その後、新川から流水して1日2回ポンプアップし、新川へ排水している。しかし、洗堀の勾配がないため、泥がたまり、悪臭の発生源となっていた。

平成20年、市の維持管理課へ申請し浚渫（泥上げ）を2年ごとに実施する確約を取り、現在実施している。更に、越後新川まちおこしの会では、よりきれいにする為に、水質検査、堀のまわりの草刈、勾配測量、住民検討会、を20年度に実施した。21、22年度では、西川からの流水（10月～3月、6回）、生物調査を実施した。22年8月には10cm位の魚（ボラの子と思われる）が群れをなして新川から上がってきた。9月には、40cm位のフナが5匹中間程まで来たが、水位が低いので、横になっていた。すぐ、西川へ放流した。

平成23年度は洗堀を観察し、様子を見て今後の対策を考える事とした。2年間の浄化活動は、どうだったか、特に何もしないで自然のままに見ていた。やはり、6月から10月までの間は、沢山の小魚が群をなして上って来ていた。洗堀は魚の住める川に甦ったと思われる。しかしこのまま何もしないで良いのだろうか。数年たつと又、元の堀に戻る気がする。24年度は、市の浚渫が実施されるので、様子を見て考えようと思っている。又EM菌（有用微生物群）で浄化する方法も研究しようと思っている。



西川の水を洗堀に注水

## 第3回能代川の稚魚放流体験と見学

丸山 久子

3年目の今年度は3月13日（日）に実施されました。今回も能代川に詳しい大井田 哲会員の案内で・見て・聞いて・触れることができ、とても有意義で心地よい初春のひと時でした。

体験と見学地は下記でした。

- ・体験：能代川（水辺公園）で稚魚の放流
- ・見学：①小阿賀野川合流点  
②酒屋と信濃川合流点  
③能代川サケ・マス増殖組合施設

### I 参加して特に感じたこと

#### 1, 子ども鮭サミット

～鮭が旅する豊かな海 鮭がのぼり育つ川と森を守ろう～

この催しに参加した平成23年度の県内の小学校と中学校を地区別でみると・上越地区10校・中越地区16校・下越地区21校で合わせて47校。

また、子どもプロジェクトの鮭飼育日記などによると春は稚魚の放流。晩秋には鮭の遡上、捕獲。そして産卵（ふ化→増殖）などの観察と体験学習を行っているようです。これらの学習は、自分たちが放流した鮭の稚魚が4～5年後には大きくなって同じ川に帰って来るといふこの現実を目に向け、各学校なりに特色ある取り組みと学習を工夫している様子がよく分かります。



鮭の稚魚を放流の参加者

鮭の一生は、自然との関わりを学習するよい機会でもあり、子ども達は自然の推理にも大変興味・関心をもって鮭の稚魚を放つということです。そして鮭の育つ海、帰ってくる川、それは自分たちの住む地域と繋がっていることに気付き、身近な生活環境についても目を向ける機会となっていることが読み取れます。

さらに子どもを通して保護者や地域の方々も関心

を示し、一緒に取り組んでいる学校も多いことを知りました。自然環境と人々の繋がりを鮭の一生を通して具体的に学びとっている学習の素晴らしさを感じました。



鮭の稚魚放流参加の6名

#### 2, 能代川の鮭料理の開発とレシピ集（冊子）

採卵後の親鮭の有効利用についての取り組みも熱心で、レシピ集を発行している。増殖組合の活動の一環としての取り組みのほか、地域のグループ、親と子、学校等々で活用し料理作りを楽しんでいるということです。

### II 参考資料

次のような資料を準備して頂きました。これからの活動に参考になると思われますので項目のみ一部記します。

※ご覧になりたい方はお声がけください。

#### サケの遡上・採捕に配慮した床止工設計

（うまい能代川の魚を食べよう！班 作成）

—能代川におけるサケ・マス増殖の取り組み—

- ① サケ・マス増殖組合とその活動
- ② サケの放流実態
- ③ サケの採捕状況
- ④ ウライ漁法
- ⑤ 捕獲数（県内の河川と捕獲）
- ⑥ 川仲間たちが目指す川づくりの理念
- ⑦ これからの取り組み ・自然産卵場の保全 ・山の管理による水源涵養 ・サケの採捕イベントの開催 ・川仲間とのネットワークづくり ・床止め工設置の目的と概要
- ① 第2捷水路における床止め工設置の目的
- ② 床止め工の位置
- ③ 設計に先立って！
- ④ サケの遡上・採捕に配慮した床止め工の条件と構造 一年を通し、すべての魚類の遡上を妨げない構造であること 一落差を持たない遡上を妨げない構造であること 経年的な河床変動に対し、採捕作業を含め、来訪者の安全が確保されること。自然素材の活用と容易な維持管理（美しい

## 能代川での取り組み

大井田 哲

河川景観を確保し、人工的な構造物とならないこと)  
施工上の工夫と多自然への取り組み

- ①施工前の状況写真
- ②粗朶沈床組立完了時の写真
- ③施工上の工夫と多自然への取り組み写真
- ④粗朶沈床組立完了写真粗朶沈床格子状況写真
- ⑤側面から粗朶沈床の写真
- ⑥沈石投入完了時の写真ほか、工事関係の写真多数  
(後略)。



能代川水辺公園(サケの路)

### Ⅲ その他

当会の活動に熱烈な思いを語る会員がおられました。その方は朝妻信一氏(サントピアワールド社長)。新川について、そして会の活動について、ご自分の思いを聞いて欲しいとおっしゃって3回ほど電話を頂戴しました。そして、この見学会に参加し、見学後にお話会を持つ予定でした。今度こそ「お会い出来る」と大きな期待をしておりましたところ、ご親戚の仏事で突然の不参加となりました。氏の「新川への大きな思い」を聞くことができず大変残念に思います。  
(8月に他界された。合掌)。



故 丸山事務局長の研究テーマであったブナ林

能代川における、地域一帯となった取り組みについて、少しだけ紹介させていただきます。

そのきっかけとして、過去の度重なる水害対策としての能代川の大改修にともない、平成16年に県、能代川サケ・マス増殖組合等の地元住民、民間団体等による「能代川多自然型川づくり研究会」が発足しました。多くの検討会を重ね、ボランティアでの手作りによる能代川水辺公園(サケの路)が平成17年秋に完成しました。

能代川サケ・マス増殖組合さんは、約30年くらい前から、先代の会長さんを中心にサケの人工ふ化を継続的に取り組み、今では毎年100万匹の稚魚を子供たちとともに春に放流しています。平成22年秋の捕獲数は7千匹を超え、自然産卵するサケを含めると約1万匹を超えるサケが信濃川～小阿賀野川～能代川の経路で遡上してきていると考えられています。

現在は、ふるさとの川「能代川」において昔から恩恵を受けてきたことに対し、「能代川への恩返し」という思いのもとで、地元での放流会・観察会・鮭料理の研究・サケのつかみどり大会等を毎年定期的に行っています。また、それにとどまらず子供鮭プロジェクトの一環として、新津川での地元小学生による放流活動、飼育・学習活動の協力や長野県千曲川への発芽卵の提供など幅広く活動を行っています。

そのような活動を通して、自然界の多様性、バランスとつながり・循環(森～川～海～森…)の大切さを大人から子供へ伝承され、また体験学習した子供たちの思い(川を少しでもきれいに)は大人たちへと伝達されていくと思います。

当会(越後新川まちおこしの会)では3年前から能代川の見学を行い稚魚の放流も行っています。丸山幸平先生(前事務局長)の専門であり、川への安定的な水や栄養分の供給源であるブナ林において、H23年は6年ぶりの種子の豊作と言われています。

また、会員の皆さんが放流したサケの稚魚たちは、おそらく3～5年後に能代川に戻ってきて新たな生命を生み出すと思います。そして、そこで携わってきた人々の思いは永遠と受け継がれていくと確信します。

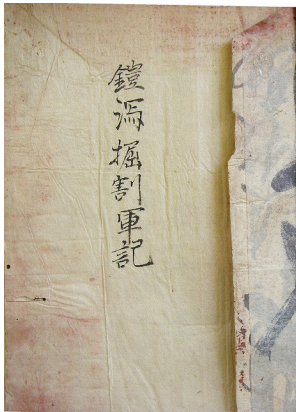
# 現存一冊の「越後内野堀割軍記」から見えてくるもの

加藤 功

## 文書データ

昨年の正月、私が新川関係の歴史を調べていることを聞いた亀田郷土資料館の新田見館長より、知人を介して「越後内野堀割軍記」という文書をスキャナーし画像データを入れたCDが送られてきた。

私は古文書を読む能力を持っておらず、さっと見ただけでパソコンに入れておいた。その後その文書の書きだし文もお届け戴いたが、それも忙しさにかまけてそれをじっくりと読もうとしなかった。その後、時間をつくり読もうとしたがなかなか歯がたたない。まだ所々に不明な点があるが、新川に関するので新川通信で紹介させていただく。

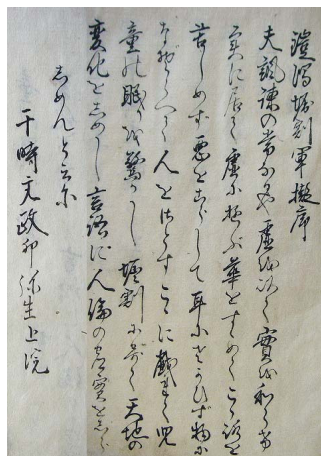


この文書はかつての亀田町高木新田（現亀田町東本町）の農家・渡辺家に伝わるものである。渡辺家の人が原本より書き写した文書であるが、この文書以外は見つかってない。原本の2頁に「于時文政卯弥生上佞」とある。「文政卯弥生」とは、文政2年（1819）の3月、まだ新川では工事の最中である。本は和綴じ本で196頁、文字は約27,000字の大作である。私は読みにくかったが新田見館長は、結構読みやすい文字で書かれていると言う。

### 鎧瀉堀割軍擬序

夫諷諫の常なるや虚を以て實を和らげ  
実に居て虚に遊ぶ華をすゝめてこゝ路を  
苦しめず悪を古らして耳に左かひず物に  
なぞらへて人をさとすこゝに戯れて児  
童の眠りを驚かし堀割に寄て天地の  
変化をしめし言語に人倫の虚實をしら  
しめんと云に

于時文政卯弥生上佞



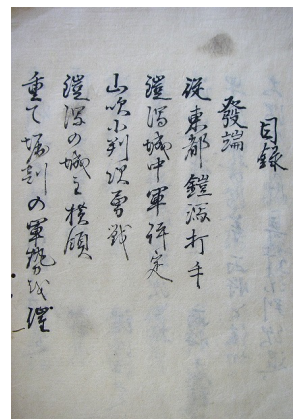
## 「軍記もの」

「越後内野堀割軍記」は、内野付近の出来事を当時の講談の一種である「軍記もの」に仕立て、当時の歴史を題材とした小説であり、「平家物語」は軍記ものの代表例である。

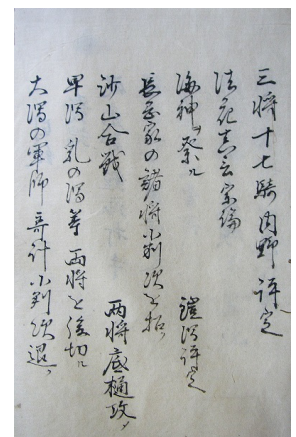
目録（目次）は12項目もあり、新川開削までの歴史を新潟町と西蒲原の多くの瀉の争いにみため、新川開削の願人・伊藤五郎左衛門を山吹小判次として描いて書かれていると思われる。

### 目録

發端 目録  
從東都鎧瀉打手  
鎧瀉城中軍評定  
山吹小判次勇戦  
鎧瀉の城主横領  
重て堀割の軍勢越催

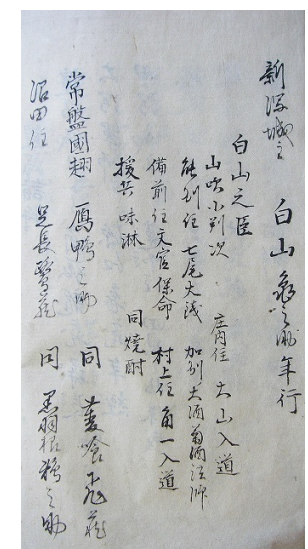


三將十七騎内野評定  
法花真言宗論  
海神ヲ祭ル 鎧瀉評定  
長岡家の諸將小判次を招ク  
沙山合戦 両將底樋攻メ  
早瀉 乳の瀉等 両將を後切ル  
大瀉の軍師奇計小判次退ク



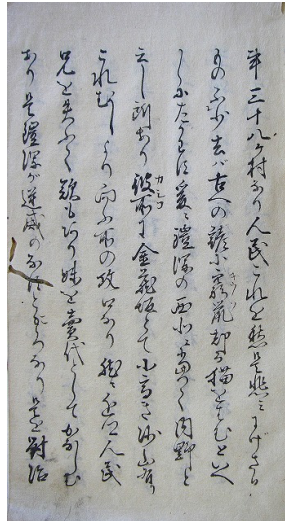
### 新潟町側の記述

新潟城主 白山龜之助年行  
白山之臣  
山吹小判次 庄内住 大山入道  
能州住 七尾大錢 加州大酒菊酒法師  
備前住 文官保命 村上住角一入道  
援兵 味噌 同 焼酎  
常磐國趨 雁鴨之助 同 蕎喰飛藏  
沼田住 足長驚藏 同 黒羽根鶴之助



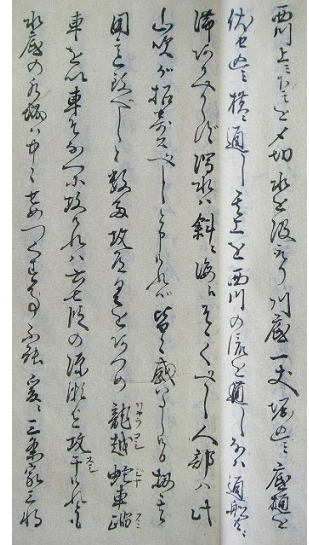
内野や金蔵坂の記述

事三十八ヶ村なり人民これを愁此悲みにげさるもの不少去ば古への諺に窮鼠却而猫をはむといへしにかたわらず爰ニ鑑潟の西北に當つて内野と云し所あり彼所に金蔵坂とて小鷹さ沙山有りこれむかしより向ふ所の攻口なり然に近郷人民兄を失ふて歎もあり妹を賣代としてかなしむあり是鑑潟が逆威のなすところなり是を對治



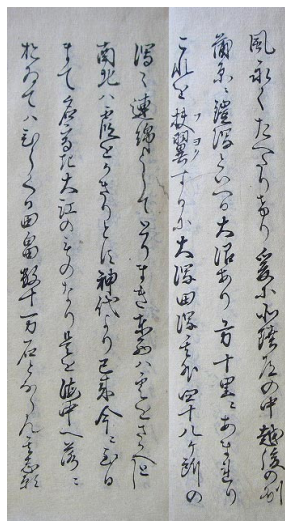
底樋や踏み車など排水の記述

西川上ミ下モをバ切水を汲取り川底一丈堀込ミ底樋を伏セ込ミ横ニ通シ其上を西川の流を通しなハ通船共ニ滞あるべからず濁水ハ斜ニ海へそくべし人部ハ此山吹が招寄スべしと申けれバ皆々感いたしける扱其用意致べしと数多攻道具をあつめ龍越蛇車踏車を以車そなへに攻けれハ六七段の源瀬攻干けれとも水底の水城ハ中々せめつくす事不能爰ニ三条家三將



大潟・田潟などの記述

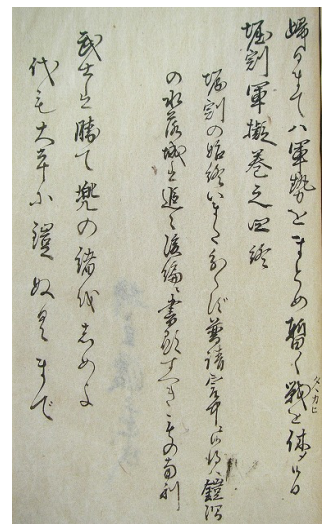
風永くたへたりけり爰に北陸道の中越後の州蒲原ニ鑑潟といへる大沼あり方十里ニあまれりこれを扶翼するに大潟田潟其外四十八ヶ所の潟々連綿としてとりまき東西ハ雲をさかへとし南北ハ霞をかきりとす神代より已来今ニ至るまで名高起大江のものなり是を海中へ落ニ於てハひらくる田島數十万石とならん其志願



前編結末の記述

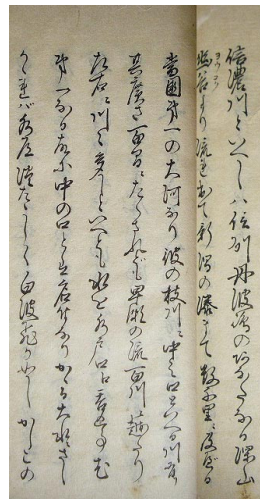
武士は勝て兜の緒を志めよ  
代も大平に鎧ぬくまで

帰るまでハ軍勢をまとめ暫く戦を休メける堀割軍擬巻之四終堀割の始終いまた分らず普請最中ニ候得ハ鑑潟の水落城は追々後編ニ書頭すへきものなり



信濃川・中ノロ川の記述

信濃川といへしハ信州丹波嶋のあなたなる深山幽谷より流れ出て新潟の湊まで数千里ニ及べる當國第一の大河なり彼の枝川ニ中之口といへる川有り其廣さ百間ニたらされども早瀬の流百川ニ越たり左右ニ川々多しといへとも水を水戸口へ吞込事尤第一なる故に中の口とは名付なりかゝる大水ニさしかゝれば水道淡たしく白波飛か如じかしこの



で終わっているが、この著者は後編を書くつもりでこれを前編としたらしく、どこかに後編があるのかも知れない。新川が出来てその後内野や鑑潟はどのように変わったのか、興味は尽きない。

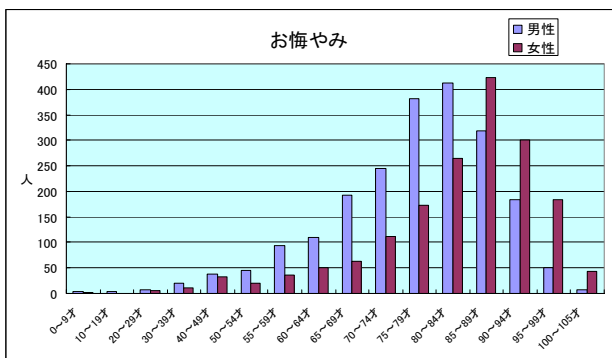
これまで江戸時代の農民は、ただその日の農作業の厳しさで勉強など出来なかったと思いがちだがそうではなく、庄屋、割り元だけでなく普通の農民も字の読み書きが出来たことを物語っている。そしてそれら近隣の情報網は、今以上に人と金の出方など真実ではないかと思われる情報もふんだんにある。越後新川まちおこしの会の会員の方で、この文書を解説していただける方がありましたらご一報ください。お待ちしております。

# 長生きしよう

小泉 勇

私たちは、若いときは、死について人ごとのように思っているものだ。しかし自分が還暦を過ぎるようになると、時には、ふっと自分が何歳まで生きられるのだろうと思うことがある。そこでこんなことを思いついた。

毎日取っている新聞に死亡欄のある事に気が付いた。毎日のお悔やみを年齢毎に性別で統計を取ってみた。期間は、平成 20 年 10 月 2 日から 21 年 5 月 31 日の 8 ヶ月間で市町村合併前の新潟市内とした。



グラフから次のようなことが分かった。

- ① 男性と女性の寿命が明らかに違っていた。
- ② 大体の人は、女性では、88 歳まで生きている。男性は、82 歳であった。
- ③ 最も長生きした人は、女性は、105 歳で、男性は、102 歳。
- ④ 一方若い人 (0~20 歳未満) は、統計を取った 8 か月間で女性が 1 名、男性が 7 名と計 8 名 (0.2%) 亡くなっている。新潟では、若くして死ぬのは、ほとんど居ない。

- ・今回は、ただ 1 回であり、新潟のごく一部の短期間の統計であり断言できるデータでないだろうと思っている。
- ・名前が男か女か紛らわしい場合は、死亡の年齢などを参考にして分類した。
- ・死亡した原因は、病気か、事故か一切不明。

最後に 100 歳以上生きている人が現実に居られるので、100 歳を目指して皆さん明るく生きましょう。

## 入会案内

本会は、新潟市内を流れる西川と新川の立体交差などの近代文化遺産とも言える、新川の歴史およびその流域で育まれた産業や文化について理解を深め、その環境保全につとめながらさまざまな活動を通じて、流域および周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に平成 19 年 2 月に発足しました。年会費 1,000 円です。ご入会をお待ちしています。

# 編集後記

事務局長 小泉 勇

新川通信は、年 1 回の機関紙です。発行を重ねて 5 号目となりました。

今年度の大事件は、2011 (平成 23) 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分にマグニチュード M9.0 の巨大地震が東日本に発生したことでしょう。新潟でも長く揺れました。その後大津波が東京電力福島第 1 原子力発電所を襲い原子炉事故が発生。これにより放射能が漏れこの収束に 30 年とも 40 年とも掛かるという大変な事態になりました。死者は、約 1 万 5900 人に上り、今でも約 33 万 5000 人が避難・転居しています。この悲しい震災を受け、春の観桜会、野外音楽会を急遽中止しました。

この地震から程なく当会の実質的な立上げ者である、丸山幸平事務局長が病に侵され入退院を繰り返されておられましたが、病状が急変し、4 月 14 日に亡くなられたのは、くれぐれも残念なことであります。

丸山事務局長は、地元の広通川自治会長になられたとき、新川のあまりに汚れていることに心を痛め、この新川を「泳いだ、獲った魚を食べた新川」の頃の新川を再現しようと志を立て、有志を募り当会を立上げ、100 余名の会員の先頭に立って会の目的達成のため活躍していました。新川の浄化は、一朝一夕には、実現できませんが、内野町を流れている洗堀が年々きれいになり、10cm 位の小魚 (ボラの子) と思われるのが数十匹群れになって遡ってくるのが何日も見られるようになって来ました。水質検査結果も少しずつ良くなってきました。これらは、小さいことですが少しずつ目標に近づいて来たことの証でないでしょうか。

小林代行の丸山事務局長の追悼文には、丸山さんの想いが良く伺えます。さらに松岡会長には、内野の宝物・西川と新川の立体交差について述べていただきました。この他多数の記事執筆して頂いた会員の各位に御礼申し上げますと共にお読みいただいた皆さんの感想は、如何だったでしょうか。

新川通信 - 5 号

年 1 回発行

(現在会員数 102 名)

●発行：越後新川まちおこしの会

●事務局：新潟市西区内野山手 2-18-8-6

電話・FAX 025-261-0235

E-mail : iikoi@r6.dion.ne.jp